

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2014～2016

課題番号：26257108

研究課題名(和文) 中東における国家安全保障と国民統合の課題 新たな平和構築・開発支援論

研究課題名(英文) Challenges of State Security and National Integration in the Middle East

研究代表者

中西 久枝 (Nakanishi, Hisae)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

研究者番号：40207832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 18,400,000円

研究成果の概要(和文)：「アラブの春」後の中東は、シリア紛争をはじめとする中東における紛争の深化と政治・経済・社会情勢の不安定化により、異なる宗教間の争いのみならず、イスラーム教徒同志が戦う局面がおこった。そうした状況下、中東における国家の安全保障とトランスナショナルな市民社会運動はきわめて拮抗した関係になっていることが判明した。当該諸国に生きる人々の生活が安全にかつ平和的に継続するには、平和構築と開発支援のあり方が抜本的に変化する必要がある。

研究成果の概要(英文)：In the post Arab Spring Middle East, due to the on-going conflicts in Syria and some other countries as well as the growing instability in the Middle East, the conflicts involved not only different religious and sectarian groups. Under these circumstances, the conflicts have emerged and prevailed among Muslims. Middle Eastern states have now faced serious challenges in securing state security and people's peaceful and sustainable livelihood and development. Completely innovative ways of peacebuilding and development assistance should be substantially constructed.

研究分野：中東の国際政治と安全保障

キーワード：トランスナショナル 市民社会組織 平和構築 安全保障 国際協力論

1. 研究開始当初の背景

中東では、9.11 事件後「テロとの戦い」や「アラブの春」を通じ、各地で戦争、紛争、内戦などがおこり、各国は国家安全保障のリスクに晒されてきた。「中東における紛争防止の学際的研究の構築」(基盤研究A 研究代表者中西久枝)の研究では、ムスリム市民社会組織は権威主義個々か体制には概して対抗的である一方、国家による社会経済的サービスの行き届かない地域や層に対して部族、宗派の違いを超えてサービスを越境的に行っており、国家の役割と補完性をもつことが明らかになった。アラブの春では、ムスリム社会組織が権威主義国家体制を打倒し、イスラーム政党を樹立した国家もあったが、ほぼ1年間のあいだに退陣要求や軍によるクーデターなどがおこり、チュニジアを除いては長続きしなかった。一方、現政権は近隣諸国や地域の紛争や内戦の影響を受け、難民やイスラーム過激派の越境活動への管理問題など、**国家安全保障体制を強化する課題**に直面している。同時に、中東では域内及び域外からの外部勢力が国内の少数派勢力に対し働きかけることで政治介入してきた歴史があり、紛争や内乱の原因になっている。中東諸国はまさにこの意味で**国民統合の課題**に直面している。上述の2つの課題、すなわち国家安全保障と国民統合の課題は、中東諸国が国民国家を維持する必要要件でありながら、ドミノ式に続く中東の政治社会変動によって国民国家の存続が危機に晒されている。中東諸侯はこれら2つの課題を同時に遂行しようとする、越境的なムスリム市民社会組織とは常に緊張関係を持つ(Posusney S. Angrist eds. *Authoritarianism in the Middle East*, 2013)。南レバノンのヒズブッラーの活動は、レバノン政府にとって国民統合に挑戦するものと捉えられた。エジプトのムスリム同胞団がパレスチナのハマスに対して行う支援は、エジプト軍の国家安全保障政策には阻害要因と位置づけられ、軍のクーデター後、エジプトとガザとの出入り門は封鎖された。タリバンの発祥地であるパキスタンでは、19世紀の英国の植民地主義により確定されたアフガニスタンとの国境線が事実上崩壊しつつある。他方、イランのムスリム市民社会組織は、国家のガバナンス機能を果たす上でのツールとなっており、政府と社会組織の利害関係者が双方にまたがっている。

2. 研究の目的

本研究は、中東において国家の安全保障と国民統合という2つの課題に対し、国家機構が越境的ムスリム市民社会組織とどのような連携、対抗関係を有してきたかを、難民の受け入れ体制、イスラーム過激派及びテロリストの管理、近隣諸国・域内及び生きがい勢力

からの介入の受け入れと排除という3つの領域で研究する。両者の関係性が、9.11 事件以降アラブの春を通じて亀裂が生じている「国民国家」の枠組みにどう影響したかを、中東6カ国の事例を比較検討しつつ、同様の課題を比較的安定的に達成してきたインドネシアとマレーシアの政治的多元主義の事例と比較参照する。その成果は国内外の研究報告会、国際会議、ウェブ上で公開し、ワーキングペーパーシリーズ、さらに本として公開・出版し、国内外に発信する。さらに、日本の中東への平和構築・開発支援に対する提言を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

研究代表者及び分担者5名が、それぞれの担当国すなわち、イラン、トルコ、エジプト、レバノン、パキスタンの国家安全保障と代表的なムスリム市民社会組織を事例的に取り上げ、研究する。文献及び現地でのフィールド調査による関係者への聞き取り調査により資料を収集する。得られた資料を学際的な手法で分析し、上述の研究目的を遂行する。各担当者が分析したデータは、研究集会で発表、報告し、論文や本などで出版する。また日本の中東諸国への平和構築及び開発支援政策への提言は、それぞれの分担者が、日本のODAの政策決定過程と関わる場面を通じて行う。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者のそれぞれの役割分担に基づき、それぞれの調査において研究分析した結果は、学会発表、論文、本の形で発信されている。また、本研究の成果は、それぞれの年度ごとに国際会議を日本の国内外で開催し、公開・発信した。

(1) 2014年度の国際会議

“Iran, America and Islamic State”と題する国際会議を2015年2月14日に同志社大学にて開催した。Mahmood Sariolghalam(イランサイドベヘシュティ大学教授)とMustafa Torkzaharani(イラン国際問題研究所所長)を招聘した。両者はイランのイラク、シリアへの安全保障政策について、日本の当該分野の研究者とともにラウンドテーブル討論を行い、観衆と越境的なムスリム組織が国家の安全保障に与える貢献と負の側面について議論した。

(2) 2015年度の国際会議

上述のフォローアップの会議として、末近浩太と中西久枝がテヘランのイラン国際問題研究所で、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科の博士課程の大学院生とともに研究発表をそれぞれ行い、「中東の不安定化とイラン・サウディアラビアの対立問題の地域的、国際的影響について議論した。

(3) 2016年度の国際会議

本科研の最終成果の公開として、”Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East”と題する国際会議を同志社大学にて、2017年1月27日に実施した。基調講演として、レバノンのノートルダム大学の Center for Migration Studies 所長の Guita Hourani 氏を招聘し、中東におけるシリア難民危機についてレバノンを事例に講演がなされた。また、イランからは Ardeshir Pashang (イラン中東問題研究所) 氏がサイクスピコ協定の崩壊とクルド問題、Rahman Shakhuseinli (アゼルバイジャン ADA 大学) がアゼルバイジャンを事例に国家安全保障と紛争の長期化と国内避難民保護の問題について、それぞれ講演された。英語で行われた国際会議であったが、2014年度の国際会議と同様、大学生、大学院生のみならず一般市民による参加があり、約50名の参加者が集い、盛会であった。

(総論)

本研究の対象国家5カ国について、研究調査の結果、以下の点が明らかになった。第一に、ムスリム同砲団のような市民社会組織の場合、エジプトの政権交代(軍事政権化)後は国家の安全保障上の脅威として位置づけられ、それまでの国家の役割との補充関係は激減した。組織の活動はトルコなど中東の他の国家に移植されたため、活動の性格が大きく変化し、移転先の国家の安全保障との関係性が新たな課題として生じた。第二に、イランのようにシリア内戦の長期化とそれへの関与が深化するにつれ、准軍組織である革命防衛隊の重要性が国家安全保障上高まった。2013年の穏健派政権の樹立後実現した核合意により、イランに対する域内での脅威の認識がやや小さくなったが、スンニ派対シーア派の対立は激化した。第三に、レバノンのようにシリア難民がレバノンの人口の20%を越える事態がシリア内戦の長期化でおこると、レバノン内の国内政治の派閥政治から派生している国民への資源配分の不均等性への国民の不満が高まり、国家安全保障上の脅威が内側から派生する結果となる。また、越境的組織であるヒズブッラーの活動の性格がシリア内戦への介入により激変し、中東域内での派閥対立を深めた。第四に、トルコのように現政権の強権化は、ディアスポラ社会で活動を続けてきた市民社会組織への圧力を強化する結果となった。またシリア内戦の長期化により、越境的なテロ活動を行うPKKやISなどに対する政策が刻々と変化し、トルコの国家安全保障上の課題も変化せざるをえず、中長期的には内部矛盾をはらんでいる。第五に、パキスタンではこれまで軍事政権とイスラーム過激派組織との関係が対立と相互依存関係の両面を有し推移してきた。2014年以降は後者が前者へのテロを展開し始め、より対立が深まった。その背景に

軍事政権に対するアメリカの経済支援の問題があり、今後も部族地域で特に不安定化は進む。

以上の研究成果を踏まえ、日本の中東に対する平和構築及び開発支援においては、いかにどのように政策提言する。

- (1) シリア、イラク内で紛争や内戦が継続している地域に対する人道支援を行う際、支援の資源がテロリストの手に渡らないよう、刻々と変化する情勢を常にモニタリングしつつ、紛争や内戦の継続を促す資源にならない新たな支援スキームを構築すべきである。
- (2) 人道支援と開発支援のリンケージとその矛盾点は、中東の紛争後及び紛争継続地域ではあらゆる形をとって露呈している。2つの支援の境界線は限りなく揺れ動いており、本来性格の異なるこれら2つの支援は連動、合併と差異化の繰り返しの中で再構築されていく課題となる。ローカル・オーナーシップを尊重しつつも、ムスリム市民社会組織の持つ平和への能力への拡大と阻害の両側面を批判的に把握しながら、かつ利害関係者の利害を調整しつつ、中・長期の視点での支援が望まれる。

本科研の研究成果は、本として出版すべく、現在目次が整い、執筆者がそれぞれの担当ページを執筆しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計21件)

1. 中西 久枝、イラン2つの選挙と今後のイラン外交、中東研究、査読無、第526号、2016、pp.86-99。
2. 内藤 正典、カリフを戴く国民国家への道—中東崩壊の中でのトルコの針路、世界、査読無、No.885、2016、pp.280-288。
3. YOKOTA Takayuki、Egyptian Politics and the Crisis of the Muslim Brotherhood since 2013、イスラーム世界研究、査読有、10巻、2017年、pp.19-31。
4. 横田 貴之、エジプトの「安定」に関する再検討—スィーサー政権下の治安・経済を中心に、インテリジェンス・レポート、査読無、93巻、2016、pp.33-41。
5. 末近 浩太、クサイルからの道：ヒズブッラーによるシリア「内戦」への軍事介入の拡大、中東研究、査読無、Vol.3、No.522、2016、pp.52-64。
6. 山根 聡、アフガニスタン安定化への課題、海外事情、査読無、9月特集号、2016、pp.91-103。

7. NAKANISHI Hisae, Politics of Performativity in Iran's Nuclear Negotiations, Working paper series for State Security and National Integration in the Middle East, 査読無、Vol.1, 2015, pp.1-19.
 8. 内藤 正典, 強権大統領への一撃—トルコ総選挙での与党 AKP 過半数割れ, 査読無、872 巻、2015、pp.20-28.
 9. 内藤 正典, 拡大する難民危機—解決は可能か, 査読無、世界、875 巻、2015、pp. 149-154.
 10. 横田 貴之, エジプト・ムスリム同胞団の「挫折」—ポスト・イスラーム主義からの一考察、国際安全保障、査読無、第43 巻第3 号、2015、pp. 29-42.
 11. 山根 聡, 対テロ戦争期パキスタンの政治・社会における内的変化、アジア研究、査読有、61 巻第3 号、2015、pp.1-17.
 12. OYAMADA Eiji, Reflection of Global Anti-Corruption Initiative: Lesson Learned from Various Global Experiences, Building Democracies: Ukraine and Japan,” National Institute of Strategic Studies, 査読無、2016、pp.178-83.
 13. SHIOZAKI Yuki, The Historical Origins of Control over Deviant Groups in Malaysia: Official Fatwas and Regulation of interpretation, 査読無、vol. 22, 2015, pp.205-232.
 14. 中西 久枝, 平和構築と地域研究—今何が求められているか、地域研究、査読有、14 巻1 号、2014、pp.106-121.
 15. NAKANISHI Hisae, The Challenges of State Security & National Integration in the Middle East Conference Proceeding of Challenges to Democratization in the Middle East, Proceeding of International Symposium on Challenges to Democratization in the Middle East: The US, Turkey and the Arab World, 査読有、Vol.1、2014、pp.1-6.
 16. 内藤 正典, トルコは不安定化するのか—内政と外交の危機、国際問題、査読無、No.629、2014、pp. 29-41.
 17. 内藤 正典, 「イスラーム国」問題の縮図としてのトルコ—なぜ米軍の武力行使に協調しないのか、世界、査読無、863 巻、2014、pp. 196-205.
 18. 横田 貴之, ムスリム同胞団ハサン・バンナー 『行動の思想』、史林、査読有、98 巻1 号、2015、pp. 172-201.
 19. 末近 浩太, 序論 中東の政治変動：開かれた「地域」から見る国際政治、国際政治、査読有、178 号、2014、pp.1 - 14.
 20. SUECHIKA Kota, Re-Configured Islamist Geopolitics after the Arab Spring: Emergence of New Islamic Community in Muslim Brotherhood's International Nexus, Center at Sophia University (SIAS) Working Paper Series, 査読無、No.25, 2015, pp. 57-79.
 21. 山根 聡, パキスタンの民主政権を支えるのは軍か、イスラームか、メディアか?、現代インド研究、査読有、5 巻、2015、pp. 53-68.
- 〔学会発表〕(計 27 件)
1. NAKANISHI Hisae, Impacts of Arab Revolts on Iran: Threat Perception and Iran's Transnational Strategy, International Conference of “Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East, January 27, 2017, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan.
 2. 中西 久枝, イラン核合意と中東の域内政治—核問題の脱安全保障化を中心に、日本国際政治学会 40 周年記念大会、中東分科会 2016 年 10 月 14 日、幕張メッセ(千葉県、千葉市)。
 3. NAKANISHI Hisae, Preventing Religious Extremism: From Global Perspectives, at the International Conference of “Combating Extremism at the Institute of Political and International Studies (IPIS), May 10, Tehran, Iran.
 4. NAKANISHI Hisae, Iran-America Relationship: Prospects for the Future, International Affairs and Diplomacy(招待講演), March 17, 2016, Norte Dame University, Beirut, Lebanon.
 5. NAKANISHI Hisae, “State Security and National Integration: Iran, Syria, and IS,” International Conference on State Security and National Integration in the Middle East: Prospects for Syria, February 29, 2016, International Studies (IPIS), Tehran, Iran.
 6. YOKOTA Takayuki, State Repression and Islamist Survival Strategy: Case of Muslim Brotherhood in Egypt, International Conference on “Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East”, January 27, 2017, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan. .
 7. 横田 貴之, エジプトのイスラーム主義運動は終焉したのか?—ムスリム同胞団の危機を手掛かりに、京都大学イスラーム地域研究センター、2016 年 11 月 19 日、京都大学(京都府、京都市)。
 8. YOKOTA Takayuki, SUECHIKA Kota, KIKKAWA Takuro, A New Authoritarian Alliance over the Muslim Brotherhood?: Egypt's anti-Islamist Foreign Policy and Re-formation of the Arab Security Alliance, June 23, 2016, Ljubljana University, Ljubljana, Slovenia.
 9. SUECHIKA Kota, Strategies, Dynamics, and Outcomes of Hizballah's Military Intervention in the Syrian Conflict,

- International Conference on “Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East” January 27, 2017, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan.
10. SUECHIKA Kota, The Rise of the Pan-Shiites Militia Network: Hizballah’s Military Intervention in the Syrian Conflict(s), BRISMES Annual Conference 2016, July 14, 2016, University of Wales Trinity St David, Lampeter Campus, Wales, UK.
 11. YAMANE So, Social and Political Modification in Pakistan in the War on Terror, International Conference on “Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East”, January 27, 2017, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan.
 12. 山根 聡, パキスタン・シャリーフ政権と軍の関係、中東情勢研究会、2016年10月17日、国際情勢研究所(東京都、港区)。
 13. DANISIMAZ Idris, How to Cope with Violence in the Information and Communication Age: An Analysis of Anti-Terror Messages of Muslims, Annual Serbian-Japanese Scientific Conference on “Social and Economic Problems and Challenges in Contemporary World,” September 12-13, 2016, Institute of International Politics and Economics, Belgrade, Serbia.
 14. NAKANISHI Hisae, “Extremism in the Middle East,” Policy Studies, The Roles of Iran Combatting Extremism in the Middle East (招待講演), November 26, 2015, Sasagawa Foundation, Minatoku, Tokyo.
 15. 横田 貴之, 「アラブの春」後のエジプトにおけるイスラーム主義運動、国際安全保障学会 2015年度年次大会、2015年12月5日、慶應義塾大学(東京都、港区)。
 16. 横田 貴之, エジプト2つの「革命」と社会運動—制度外政治の「制度化」に関する一考察、日本比較政治学会第18回研究大会(分科会E「社会運動の政治学」)、2015年7月18日、上智大学(東京都、千代田区)。
 17. 未近 浩太, 中東政治は「宗教対立」を乗り越えることができるのか: 「アラブの春」から「イスラーム国」へ、日本中東学会(招待講演) 2015年5月17日、同志社大学(京都府、京都市)。
 18. SUECHIKA Kota, Prospects for Syria: Towards the End of the Crisis, International Symposium on “State Security and National Integration in the Middle East: Prospects for Syria” (招待講演), February 29, 2016, Institute for Political and International Studies (IPIS), Tehran, Iran.
 19. NAKANISHI Hisae, The Linkage between Nuclear Negotiations and the US-Iran Conflict and Cooperation, International Conference on Iran, America and Islamic State: Emerging Challenges in the Middle East, Views from Iran, February 14, 2015, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan.
 20. SUECHIKA Kota, The “Resistance Axis” and the Post-Arab Spring Middle East Regional (Dis)order, International Conference on Iran, America and Islamic State: Emerging Challenges in the Middle East, Views from Iran, February 14, 2015, Doshisha University, Kyoto, Kyoto, Japan.
 21. NAKANISHI Hisae, The Construction of the Sanction Regime against Iran: Political and Strategic Dimensions, Duke University’s Academic Circle, December 3, 2014, Center for Iranian Studies, Columbia University, New York, New York, USA.
 22. NAKANISHI Hisae, Economic Sanctions against Iran and Security Policies of Iran, Duke University’s Academic Circle (招待講演), November 14, 2014, Department of Asian and Middle Eastern Studies, Duke University, Durham, North Carolina, USA.
 23. NAKANISHI Hisae, Iran’s Nuclear Problem, Duke University’s Academic Circle (招待講演), November 7, 2014, Department of Asian and Middle Eastern Studies, Duke University, , Durham, North Carolina, USA.
 24. YOKOTA Takayuki, SUECHIKA Kota, KIKKAWA Takuro, Re-Configured Islamist Geopolitics after the Arab Spring: Emergence of New Islamic Community in Muslim Brotherhood’s International Nexus, ISA PDG-Collegium Civitas Joint Eurasia Conference, June 18, 2014, Collegium Civitas, Warsaw, Poland.
 25. 横田 貴之, ムスリム同胞団の『行動の思想』—ハサン・バンナーを中心に、2014年度史学研究会例会(招待講演) 2014年4月19日、京都大学(京都府、京都市)。
 26. SUECHIKA Kota, Reconfiguring Sectarian and national Identities in Lebanon: The Case of the Lebanese Armed Forces (LAF), The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES), August 19, 2014, Middle East Technical University, Ankara, Turkey.
 27. SUECHIKA Kota, The “Resistance Axis” and its Implication for the Post-Arab Spring Middle East Regional (Dis)order, 日本中東学会第30回年次大会、2014年5月11日、東京国際大学(埼玉県、川崎市)。
- 〔図書〕(計15件)
1. 中西 久枝, 大幸財団、イスラームと現代世界—平和と共生への視点、2017、36頁。
 2. 中西 久枝, 日本産学フォーラム、イスラームの幻想性と柔軟性(研究報告

- No.40) 2016、33 頁。
3. 中西 久枝・初瀬龍平・松田哲・戸田真紀子編著、晃洋書房、国際関係のなかの子どもたち(「国内避難民」)、2016、267 頁(157)。
 4. 内藤 正典、集英社、トルコ—中東情勢の鍵をにぎる国、2016、237 頁。
 5. 横田 貴之、末近 浩太(私市正年・浜中新吾・横田貴之編) 明石書店、中東・イスラーム研究概説—政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論、2017、390 頁(233-240(横田); 19-28(末近))。
 6. 横田 貴之(北澤義之・高岡豊・横田貴之編訳) 岩波書店、ハサン・バンナー著『ムスリム同胞団の思想—ハサン・バンナー論考集』(下巻) 2016、348 頁(433-452; 459-613)。
 7. 末近 浩太(松尾昌樹・岡野内正・吉川卓郎編)、ミネルヴァ書房、『中東の新たな秩序(グローバル・サウスは今 第3巻)』、2016、344 頁(41-58)。
 8. 末近 浩太(久保慶一・末近浩太・高橋百合子著) 有斐閣、『比較政治学の考え方』、2016、290 頁(担当ページ区分なし)。
 9. NAKANISHI Hisae, Springer, *Economic Sanctions under International Law: Unilateralism, Multilateralism, Legitimacy, and Consequences*, 2015, 249p (pp.23-41).
 10. 内藤 正典編、明石書店、イスラーム世界の挫折と再生「アラブの春」後を読み解く、2014、352 頁(11-22、86-111、350-352)。
 11. 横田 貴之、(青山弘之編) 岩波書店、アラブの心臓に何が起きているのか：現代中東の実像、2014、xx vi-206 頁(85-115)。
 12. 末近 浩太、(青山弘之編) 岩波書店、アラブの心臓に何が起きているのか：現代中東の実像、2014、xx vi-206 頁(1-28)。
 13. 山根 聡(三尾稔ほか編) 東京大学出版会、現代インド 6—還流する文化と宗教、2015、348 頁(281-303)。
 14. 山根 聡・長縄宣博編著、ミネルヴァ書房、越境者たちのユーラシア、2015、233 頁(1-50)。
 15. 塩崎 悠輝、作品社、国家と対峙するイスラーム マレーシアにおけるイスラーム法学の展開、2016、342 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中西 久枝 (NAKANISHI Hisae)
同志社大学・大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授
研究者番号：40207832

(2) 研究分担者

内藤 正典 (NAITO Masanori)
同志社大学・大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授
研究者番号：10155640

横田 貴之 (YOKOTA Takayuki)
明治大学・情報コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：60425048

末近 浩太 (SUECHIKA Kota)
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：70434701

山根 聡 (YAMANE So)
大阪大学・言語文化研究所・教授
研究者番号：80283836

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者
小山田 英治 (OYAMADA Eiji)
同志社大学・大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授
研究者番号：30580740

ダニシマズ イディリス (Danismaz, Idiris)
同志社大学・高等研究教育機構助教
研究者番号：70631919

塩崎 悠輝 (SHIOZAKI Yuki)
早稲田大学・特別研究員 (PD)
研究者番号：713808